

【ポスター発表】

**福祉系大学生の障害者に対する態度について**

—非顕在的態度を中心に—

○ 金城大学 岡村 綾子 (3446)

〔キーワード〕 障害者, 態度, 福祉系大学生

**1. 研究目的**

社会福祉系大学の開学初年度より新入学生を対象にボランティア等の社会福祉に対する態度に関して質問紙調査を行ってきた。また、学年進行に伴い障害者に対する理解が進み、態度の変化もみられるため、学年進行の都度同様の質問紙調査を行ってきた。今年度の調査では、障害者に対する考えについての質問を加えた。特に今回では、状況を一切仮定しないで極めて一般的問いかけで答えられる場合の障害者に対する態度と、障害者との関係が密接な状況を仮定した場合の障害者に対する態度との違いについて検討することにした。

**2. 研究の視点および方法**

**研究の視点：**大学入学以前と比較すると大学入学以後、一般的問いかけにより答えられた障害者に対する態度は、「拒否」から「理解」へと変化がみられるが、障害者との関係が密接な状況を仮定した場合の障害者に対する態度と一致しているかどうかを確かめる。

**研究方法：**調査対象 A福祉系大学の2014年度3年生169名を調査対象とした。調査内容 障害者に関する読書の有無、障害者に関するテレビ等の視聴の有無、一般的な問いかけによる障害者に対する態度、障害者という言葉聞いてイメージすること、障害者のことを初めて知った時期、障害者との関係が密接な状況を仮定した場面の障害者に対する態度などについて調査を行った。今回の研究では、障害者に対する態度に関してのみの検討を行った。調査方法 年度初めのオリエンテーションの機会を利用して質問紙を配布し、自記式集合調査を行った。

**3. 倫理的配慮**

調査対象者には、研究の趣旨と内容、得られたデータは研究目的以外には使用しないことについて事前に説明した上で調査への参加を要請し、調査参加をもって研究協力受諾とした。また、調査結果においては検討・分析に際して個人が特定できないように配慮した。

**4. 研究結果**

調査対象は、調査用紙を回収した169名中146名分(回収率86.4%)のうち欠損値のあった31名分を除いた115名とした(有効回答率78.8%)。

大学入学直後に実施した一般的な問いかけによる障害者に対する態度を大学入学前と入

学後で比較すると、「別世界の人」「『はれもの』にさわるような接し方をしてしまう」「偏見をもっている」「差別している」については入学前に比べ入学後は減少し、「普通の人」「同じ仲間」は入学後が増加した。しかし、障害者との関係が密接な状況を仮定した場合の質問として、「結婚相手の家庭に障害者がいるとどうするか」に対して、一般的な問いかけに「普通の人」と回答した5割以上の者に、「驚く」「関わりたいと思わない」「お世話の問題を考えてしまう」「受け入れる」「一緒に過ごすため一番いい方法を考える」「情報収集を一番初めにする」などのような回答がみられ、また3割ほどの者が「どうもしない」「気にしない」「結婚する」と回答した。同様に一般的な問いかけに「同じ仲間だ」と回答し5割以上の者に、「子どもに遺伝しないか不安になる」「関係ないと思いたい、実際はわからない」「家族だから受け入れる」などのような回答がみられた。また、2割ほどの者は「気にしない」「結婚する」と回答した。

他方、「別世界の人」と回答した者は、「特に気にせず、力になることがあったら手助けしたい」「普通に接する」と回答していた。また、『はれもの』にさわるような接し方をしてしまう」と回答した者は、「理解して普通の人と一緒に接する」「その時ならないとわからない」と回答し、「偏見をもっている」と回答した者は、「結婚する」と回答し、「差別している」と回答した者は「協力する。大切な家族。」「わからない」と回答していた。

## 5. 考察

これまでの報告では、学年が進行するほど、障害者に対する理解が進むとしてきた。今回の調査では、「結婚相手の家庭に障害者がいるとどうするか」という質問項目を設け、自由記述をしてもらった。一般的な問いかけで障害者に対する態度を用意された選択肢から選ばせた場合、「普通の人」「同じ仲間」を選んだ者が多かった。しかし、障害者のことを「普通の人」として理解しているのであれば、結果で示したように「驚く」「関わりたいと思わない」「お世話の問題を考えてしまう」「受け入れる」「一緒に過ごすため一番いい方法を考える」「情報収集を一番初めにする」などの回答はあり得ない。また、「同じ仲間」として理解しているのであれば、「子どもに遺伝しないか不安になる」「関係ないと思いたい、実際はわからない」「家族だから受け入れる」などの回答はあり得ない。一般的な問いかけによる障害者に対する態度を顕在的態度（栗田・楠見 2012）とするならば、密接な関係のある状況を仮定した場合の態度は非顕在的態度といえる。したがって本研究結果から、障害者に対する理解については、顕在的態度と非顕在的態度とは一致しないと言える。このように一致しない結果は、現行の制度とか、教育の在り方が影響しているといえるが、実際は極めて複合的な条件が考えられる。そこで、今後、非顕在的態度に及ぼす変数を可能な限り抽出する必要がある。

文献：栗田李佳・楠見 孝（2012）障害者に対する両面価値的態度の構造—能力・人柄に関する潜在的—顕在的ステレオタイプ—。特殊教育学研究，49（5），481—492。